

ハートランドしぎさんは県下最大規模の病床を有する精神科病院です。研修では予診や外来・病棟診察などを通じて、患者さん自身が今の課題を整理したり対応策を選んだりする一助となるにはどうしたらいいか、患者さんに寄り添った医療とはなにか深く考えるきっかけとなりました。私が精神科研修で体験したことを幾点が記したいと思います。

まずは自分一人で予診をとることです。今のお困りごとや幼少期からこれまでの人生について患者さんから伺う機会に恵まれ、患者さんの人生を追体験しているように感じることもありました。指導医からは「病院で最初に出会う診療者」としての責任をしっかりと意識するように指導を受け、「米国では精神科の予診はそもそも上級医の仕事で新人の業務ではない」ことも知りました。さらに、自分が関心を持っている領域でそのスキルや態度を活用できるように、研修内容や方法を自由にアレンジすることを勧められました。他の診療科にも通ずる予診の重要性とスキルを学ぶことができたのは、非常に大きな収穫でした。その後の本診察では自分もその診察室の構成者であることを意識した指導をうけ、ただの見学傍観者ではない体験になりました。

そして、措置入院の鑑定に立ち会いました。精神疾患に起因した危険行為から本人や周囲の人を守るため精神保健指定医や看護師、精神保健福祉士、事務職、県職員や警察など様々な職種が迅速に連携していました。これまで紙面上の知識でしかなかった事柄を生きた経験として目の当たりにし強く印象に残りました。

また、デイケア研修ではリハビリテーションや社会復帰を目指した取り組みに触れることができました。特に就労に関しては、院内での軽作業や接客、外部の作業所など段階的な支援があり病院と社会の橋渡しが途切れることなく行われていると感じました。

ハートランドしぎさんでは精神科救急から認知症まで、子供から高齢者まで、そして、常勤の内科・放射線科・歯科医による身体合併症対応まで、包括的な医療が行われていました。写真のように多職種の方々が職種に関係なく意見を交わし合うことのできる、恵まれた環境での1ヶ月間は私にとって将来に向けた大きな糧となりました。お世話になりました院長先生、臨床教育センターの先生方をはじめ全ての職員の皆様にこの場をお借りして御礼申し上げます。些細な雑談や随時行われる講義にもさまざまなきづきがありました。「自分の進む進路に応じて自由に希望・選択して研修できるから☆」という言葉に救われました。本当にありがとうございました。

